

# 鎖鼻, 鎖陰, 鎖肛, 鎖宮の語史

——とくに初出文献と初出年について——

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

受付：平成30年2月14日／受理：平成31年4月24日

**要旨：**19世紀初頭、華岡青洲は「麻沸散(湯)」を開発して外科領域に新境地を開拓した。一方で手術対象となる2, 3の病名も造語したといわれてきたが、それらの初出史料, 初出年などの詳細はこれまで不明であった。著者は青洲によるとされる造語中「鎖鼻」, 「鎖陰」, 「鎖肛」と彼の高弟本間玄調による造語「鎖宮」を取り上げ、それらの初出史料, 初出年を検討した。「鎖肛」は徐春甫の「古今医統(大全)」(1557)に披見されるが、中国では既に13世紀末から「鎖肛」の語が存在した。両語は日本に伝えられ、日本では「鎖肛」が普及した。青洲はこの事実を知らずに独自に「鎖肛」を造語したと考えられる。「鎖陰」, 「鎖肛」の2語は現在も医学界で使用されている。

**キーワード：**華岡青洲, 本間玄調, 鎖陰, 鎖肛, 鎖宮

## はじめに

新しい概念や学問分野が導入される際、あるいは、新しい事物が発明・開発された際に、それに対応する名称が必要となる。著者の専門分野の例を示すと、1846年10月にアメリカのWTG Mortonがエーテル麻酔の公開実験に成功するや、エーテルの吸入によってもたらされる生体の変化、すなわち意識消失、痛覚消失の状態はanesthesia (an+esthesia, 感覚がないという意)という言葉が援用されて対応された<sup>1)</sup>。そして、この語が世界的に急速に普及した。エーテル麻酔に関するオランダ語の訳書(原書はドイツ語)がわが国に輸入されて、これを重訳した杉田成卿は1850年に「麻酔」という比較的新しい熟語を援用した。エーテル蒸気の吸入によってもたらされる状態というそれまでわが国では全く未知の概念を表現するために、阿片の薬理作用全般を表現するためにわが国で造語されていた「麻酔」の語を利用したのである<sup>2)</sup>。エーテル蒸気の吸入による状態は、内服や外用による薬物の効果を示す言葉、あるいは疾病

による身体の一部の感覚欠如・運動機能不全を示す従来の用語「麻木不仁」, 「麻痺」, 「昏倒」, 「昏睡」, 「麻睡」とは異なると考え、新しい熟語に対応しなければならぬと成卿が考えたからであった。成卿によって「麻酔」に新しい語義が付加されたことになる。このように「麻酔」はエーテル蒸気の吸入による状態を表現したのであるから、以来、主として意識消失を伴う「全身麻酔」を意味した。明治時代に入って、コカインの注射以外による局所の麻酔方法の情報がドイツからもたらされ、それを表現するために石黒忠憲によって「局所麻酔」という熟語が1878年に造語された。「麻酔」と「局所麻酔」では字数的に均衡が取れないため、エーテル、クロロフォルムによる麻酔は、全身に作用することから「全身」の2字を冠して「全身麻酔」と称された<sup>3)</sup>。したがって、「局所麻酔」, 「全身麻酔」という用語が誕生したのは1878年である。このため成卿が援用した「麻酔」は全身麻酔のみを指すのではなく、「局所麻酔」を含む広い意味を有する言葉に変化した。このように新しい用語の造語・援用、さらには新しい語義の

付加によってその分野の領域が確定し、それによって学は問がさらに進歩もする。科学の各分野で用語集が作られている所以である。医学の分野もこの例に漏れることはなく、医学全般にわたる用語集や各専門分野別の用語集が作られている。

わが国は、5世紀以来、朝鮮半島を経て、あるいは直接中国大陸から伝えられた漢方医学の強い影響を受けてきた<sup>4)</sup>。当然、わが国では病名を含む医学用語の多くは漢方医学のそれらを採用した。しかし、本邦で医学が進歩するにつれて、新しい病名を作る必要性が生じてきた。その必要性を最も強く感じたのは、全身麻酔薬「麻沸散」を開発して外科領域に新しい分野を開拓した紀州の華岡青洲（以下「青洲」）であった。乳癌を始めとする多くの疾患は不治とされ拱手傍観する以外に方法はなかった。もちろん出来る限りの対処療法が採られたことはもちろんである。それ故に、一部の疾患では敢えて病名、さらには治療法の名称を新しく作る必要性も殆んどなかったのである。しかし、青洲によって全身麻酔下に選択的手術が行われるようになって、対象疾患とそれらの治療法は改めて注目を浴びるようになった。具体的には青洲が漢方の外科書として依拠していた「外科正宗」<sup>5)</sup>にも記述がない「鎖鼻」、鎖陰、鎖肛であった。「鎖陰」、「鎖肛」の用語については、呉秀三によって華岡青洲による造語とされてきたが<sup>6)</sup>、それらの初出文献や初出年については、その後の研究によっても特定されていなかった<sup>7)</sup>。著者は青洲研究の過程で青洲による著述に関して多くの写本を閲覧・研究してきたが、今回、これらの用語の初出文献、初出年を特定できたので報告する。この問題は青洲の業績を評価する上で看過できない重要な課題である。

### 1. 「鎖鼻」について

呉は青洲による「鎖鼻」の一治療例を紹介している。すなわち、13歳の少女は天然痘に罹患後、鼻腔閉鎖、つまり「鎖鼻」となった。青洲は、麻沸散投与後、鼻腔中にメスで孔を開け、外側にセットン（猛汞）を塗布した紙を巻いた長さ2.5 cmほどの中空の接骨木を差し込んだ。全治ま

で6, 7ヵ月も要したという<sup>8)</sup>。しかし、呉はこの「鎖鼻」を青洲による造語とは記していない。「鎖」が語頭につくことから「鎖鼻」は青洲の造語である可能性が高いが、このことは青洲の高弟本間玄調（以下「玄調」と略）が「瘍科秘録」の「巻四」で次のように記述していることから推測される。文末の「華氏」とは華岡青洲のことである。

悪痘を患ヒ、鼻<sup>ハナノアサ</sup>□ノ腐爛スルモノ、収醫スルニ從テ狭窄ニナリ、数日ヲ経レハ全ク閉塞シテ、少シモ通ゼズ。第一、呼吸ヲ妨ケ、言語モ鼻ニカカルナリ。臥寝スル寸ハ、殊ニ氣息苦ク、傍ニ居ルモ難儀ナルモノナリ。華氏ニテ鎖鼻ト名ク。<sup>9)</sup>（□は「瓮」に似た字であるが、漢和辞典にない。句読点—松木）

「鎖鼻」の病名は青洲が主に準拠した「外科正宗」<sup>5)</sup>にも披見されない。呉は文献として「華岡氏治術図識」<sup>10)</sup>と「瘍科瑣言」<sup>11)</sup>を示している。「華岡氏治術図識」<sup>10)</sup>から引用した13歳の少女の例は手術が行われた正確な時期を特定できない。この史料は1818年6月に行われた石淋の手術例を記載していることから、1818年6月以降に成立したものであり、したがって「鎖鼻」の語の成立もこの時まで遡ることが出来る。

一方、「近世漢方医学書集成29 華岡青洲（一）」に収載された「瘍科瑣言」の写本では、「鼻痔」の項に「鎖鼻ハ、三稜針ニテ切アケ、其穴へ紙を平ニシテ折、外へセットンヲ貼シ、内鼻梁ノ方へツカサルヤウニシテ入ルヘシ。」（句読点—松木）<sup>11)</sup>とあって、確かに「鎖鼻」の語が見出されるものの、この写本の書写者、書写年代が全く不詳である。

著者（松木）が所蔵する「瘍科瑣言」の一写本は書写者、書写年は不詳であるが、内題「瘍科瑣言」の下に「青洲先生口授 門人 播磨三輪敬節 述 淡路小川輜菴校」とある。巻末に識語はない。丁寧に書写された写本で、三輪らの稿本であることを窺わせるが、三輪の筆跡か否か比較する史料がないので断定はできない。三輪敬節の入門年

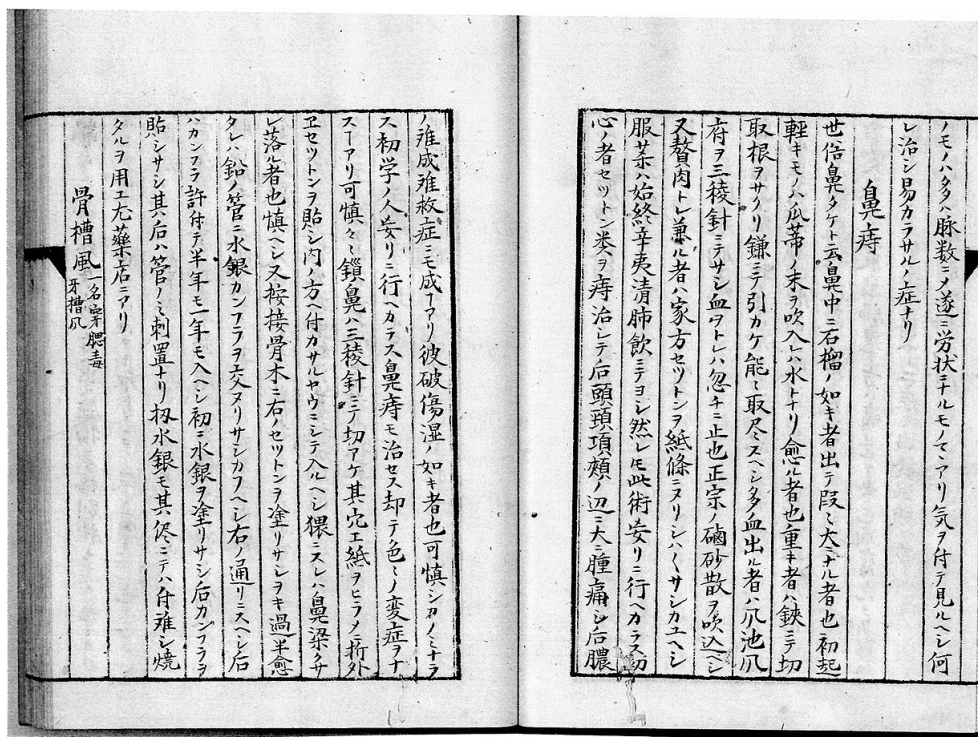


図1 「瘍科瑣言」(青洲先生口授，門人 播磨三輪敬節述 淡路小川輔菴校)の「鼻痔」の項(本文47丁裏と48丁表)48丁表第3行に「鎖鼻」の語が見える。

1807年(文化4年，月日不詳)と小川輔菴の入門年1808年(文化5年，月日不詳)から推察するに，この写本は遅くとも1809～1810年までには作られていたと推測される<sup>12)</sup>。この写本の「鼻痔」の項に図1に示したように「鎖鼻ハ，三稜針ニテ切アケ，……」とあって上に引用した「近世漢方医学書集成29 華岡青洲(一)」収載の「瘍科瑣言」中の説明文と同じ文章が認められる。したがって，現時点では「鎖鼻」の語の初出は1809～1810年まで遡ることが出来る。管見では「鎖鼻」に言及している史料としてはこの文献が最も古く，これに先行する中国や日本の医書にこの語は披見されない。

## 2. 「鎖陰」について

呉は「鎖陰」について『鎖陰』ハ青洲先生ガ始メテ唱ヘタル名ニテ……』と記し，この用語が青洲の造語によると記しているが<sup>13)</sup>，これは玄調の「瘍科秘録」の「巻四」に「鎖陰は華氏ノ始テ

唱ヒタル名ニテ，婦人生レナガラ，陰戸塞テ嫁スル事ノナラヌ者ノ事ナリ。」とあるのに準拠したものであろう<sup>14)</sup>。呉は引用史料として玄調の「瘍科秘録」<sup>14)</sup>の他に「青洲先生医談」<sup>15)</sup>を示している。呉が参考にした「青洲先生医談」の写本を今直ちに特定することは出来ない。「青洲先生医談」(「青洲医談」とも云う。以後「青洲医談」)の写本は少なくとも60数本その所在が知られているが，その成立は複雑である。著者による未発表の知見では，「青洲医談」は内容的には4部に分かれており，それらが複雑に取捨選択されて多数の一卷本の写本が出来たと推察される<sup>15)</sup>。写本が多数存在するにも拘わらず，書写年代が明らかな写本はわずかで，多くは「鎖陰」の項目を欠いている。例えば，現在知られている最も古い写本は1816年に書写されているが，この写本には「鎖陰」の記述は見られない<sup>16)</sup>。「青洲医談」の最も権威ある写本は，玄調によって1850年に編集された「春林軒二十一種」の五，六集に収められた



4巻本の「青洲医談」である。この中の「巻之三」は内容的には前述した「瘍科瑣言」の補遺と称してもよく、「瘍科瑣言」に漏れた疾患にも言及している。その「巻之三」に「鎖陰」の項目があり、「此症種々アリ。ロニテ塞リシアリ、中ニテ塞シアリ、就中ムツカシキハ子宮ロニテ塞リシ也」とある<sup>17)</sup>。この「巻之三」の系統の写本は殆んどなく、したがって、「青洲医談」の写本のみからは「鎖陰」の起源を探ることは困難である。同じく4巻本「青洲医談」「巻之一」<sup>18)</sup>にも「鎖陰并鎖肛鎖吻」の条があり、浪華の一婦の症例を提示して手術法に及んでいるが、この記述によっても年代の特定はできない。

呉は1824年の年紀を有する「鎖陰治法記」なる史料を全文復刻している<sup>19)</sup>。「阿州徳島ノ商某一女子十七歳」の症例の記録であるが、この史料の所在は不明である。これによれば、青洲は「鎖陰」には産婦陰門破裂後の癒着によって鎖陰状になるもの、梅毒によって狭窄して鎖陰状になるもの、そして生来狭窄のもの3種類があるとし、この患者は生来的「鎖陰」と診断した。この分類は上述した「青洲医談」の分類より粗であり、「陰門破裂後の癒着」と「梅毒による狭窄」は「青洲医談」の「ロニテ塞リシアリ」に相当し、「生来狭窄のもの」は「青洲医談」の「中ニテ塞シアリ」つまり処女膜閉鎖に相当すると考えられる。「鎖陰治法記」<sup>19)</sup>では未だ子宮口閉鎖には考えが及んでいないことを示している。この十七歳の女子では麻沸散による全身麻酔下に狭窄部位を切開し、紫雲加密蛇退皮膏薬を塗布した軟綿を挿入した。この患者は別に左の鼠径部に鶏卵大の腫瘤があり、これも麻沸散による全身麻酔下に摘出した。摘出した腫瘍は「灰色ニシテ軟肉ノ聚簇セル如ク、更ニ血絡ノ相纏フコトナク」とあるので、脂肪腫のようなものだったのであろう。ここで注目すべきは、この少女の「鎖陰」の手術において、青洲が手術操作を容易にかつ安全に行うために鼈甲製の中空の張形を利用したことで、これによって「ソレヲ陰内ニ押入レ見ルニ、孔内開豁ニシテ、軟膜ノ織状・宮口ノ針処脹質中ヨリ分明ニ窺ハル。」(句読点一松木)であった。門人たちも青洲

の当意即妙に驚いたというが、恐らくこれが青洲の言う「吾術は心に得て、手に応ずるもの」なのであろう<sup>20)</sup>。なお、青洲の用いた中空の張形は後述する玄調の「窺宮管」の原型(プロトタイプ)であると思われ、玄調はこれからヒントを得たのであろう。

杏雨書屋に「鎖陰治法記」と同名の史料がある<sup>21)</sup>。全3丁で、「東郭先生医談」の末尾に合冊されている。以下「杏雨書屋本」とする。識語によれば、伊予の岩井克讀文と美濃の後藤退希玄が1824年に筆記したものを、翌1825年5月に「義助」なる人物が「小心亭」で書写したという。前二者は春林軒の門人とも目されるが、門人録<sup>22)</sup>を見ても直ちに該当する人物を特定できない。このことについては後日を期したい。本文については、呉が復刻した文と殆んど同じ主旨であるが、同一ではない。例えば末尾の文は、呉の復刻文では「嗚呼青洲先生ニアラズンバ誰カ能ク此術ヲ施スモノアランヤ。余輩感悟ニ堪ヘズ。聊カ其十一を記シテ以テ後考ニ備フ。」とあるが、杏雨書屋の写本では「嗚呼青洲先(「生」欠落)ナクンハ誰カ能ク此術ヲ施ス者アランヤ。余輩感悟ニタヘス。イササカ其十一を記シテ後考ニ備フ。」とある。両者にはこの程度の違いが認められるが、肝心の鎖陰の状態、治療法に関しては齟齬がない。

内藤記念くすり博物館の大同文庫にも「鎖陰治法記」<sup>23)</sup>がある。「産科瑣言」、「天刑秘録」と合冊された3丁の冊子(以下「大同文庫本」)である。識語に「于文政七甲申八月既望 伊予 岩井克讀文 美濃 後藤退希玄(「文政七甲申」=1824)とあるから、上述の杏雨書屋本と同系統の写本である。しかし、文章自体は杏雨書屋本よりも一層呉が復刻した文章に近い。例えば、冒頭の文に関しては、呉の復刻文では「阿州徳島ノ商某一女子ヲ伴ヒテ、遙ニ我青洲先生ニ来テ治ヲ請フ。歳十七。容貌殆ンド患ナキモノ、如シ。竊ニ之ヲ義スルニ決シテ下部ノ疾患フルナラン。」であるが、大同文庫本では「阿州徳島ノ商某一女子ヲ伴シテ、遙ニ我青洲先生ニ来テ治ヲ請フ。歳十七。容貌殆ト患ナキモノ、如シ。竊ニ之ヲ義スルニ決メ下部ノ疾患ナルナラント。」(原文には句読点はな

いが、呉の文に合わせて付した。一松木) また、末尾の文は「嗚呼青洲先生ニアラスンハ誰カ能ク此術ヲ施スモノアランヤ。余輩感悟ニ堪ヘス。聊カ其十一を記メテ後考ニ備フ。」とある。筆録者名、書写年が記されていることからすれば、大同文庫本が最も原本に近く、それを1年後に書写したのが杏雨書屋本であり、大同文庫本の筆録者名を欠く写本を復刻したのが呉の復刻文であることが分かる。いずれにせよ、これら3史料の内容が殆んど同じであるから信頼するに足ると見てよい。以上から「鎖陰」の初出は1824年まで遡行することが出来る。

広田 泌(伝亮, 子泉)は1819年(文政2)に春林軒に入門したが、青洲は彼の人物、学力を認めて「続禁方録」の編集を命じた。広田はこれに応えて1821年にこれを完成させた。広田は在塾中の1822~4年(文政5~7)に経験した症例を抄録的に記した「見聞録」を遺したが、その1822年中の記事に「鎖陰」の語が出現する。以下に示すように鉗子分娩について述べた「回生術口授」中に披見される。

(児ヲ)引出ス間、右手ノ臂、彼蹲踞シタル右足ノ股ニ承引ヘシ。是最モ專要トスヘキ事ナリ。不然ハ、誤テ鉤ハツレ大ニ陰門ヲ損傷スル事アリ。産後陰門破裂、小便失禁、或鎖陰トナル者ハ是皆多ク医ノ誤也。(括弧内は著者の補、句読点は著者による)<sup>24)</sup>

管見では現時点でこれが「鎖陰」の語が披見される最も古い史料である。呉が詳しく紹介した「華岡家治驗図巻第一」<sup>25)</sup>の症例78と79は「鎖陰」の症例であるが、この図巻は1838年になったものである。船曳卓堂は1850年にJJ Plenckの著を翻訳して「婦人病論」を出版した<sup>26)</sup>。その中で「鎖陰」を「陰門閉鎖する者ナリ」として「陰唇ノ駢鎖」、「處女膜ノ蔓延」、「陰腔ノ駢鎖」、「子宮口ノ駢鎖」の4種に分類した。このことは最幕末期には「鎖陰」の語が普及して蘭医の間でも使用されていたことを示している。以上のことから、現在の知見では「鎖陰」の初見は広田 泌の「見聞

録」<sup>24)</sup>が記録された1822年までに遡ることが出来る。管見ではこれに先行する中国や日本の医書にはこの語は披見されない。

### 3. 「鎖肛」について

「鎖肛」についても、玄調は「瘍科秘録」巻四の「鎖肛」の項で「鎖肛モ亦華氏ノ新ニ名ヅクル所ナリ。医学入門ニ初生穀道無道。乃肺熱閉ニ於肛門。以下略」<sup>27)</sup>と記している。この玄調の記述によって、以来、日本では「鎖肛」は青洲の造語であると長年信じられてきたが、事情は以下に記すように些か複雑である。

小児の肛門の狭窄・閉鎖状態を表現する用語として中国では古くから「鎖肚」の用語が存在した。今直ちにその初出を明確に指摘することは出来ないが、遅くとも13世紀の末、1294年に曾世榮が編集した「活幼心書」にこの語が披見される。すなわちその中巻の「腹痛三十」において、小児の腹痛は蔵寒痛、盤腸内吊痛、積痛、偏墜痛、寒仙痛など多数あるとして、その中に一つに「鎖肚痛」を挙げて「鎖肚痛 一月内の嬰孩、忽ち乳咽を下らず。肚は硬く石の如く、赤きこと朱の如く、撮口して哭す。」(原漢文)<sup>28)</sup>とある。しかし、この文面からは直ちに「鎖肚」が肛門の完全な閉鎖を意味するとは受け取れない。次いで1343年になった危亦林の「世医得効方」の巻十一「小方科活幼論」には初生時の疾病、臍風、撮口、吊腸を示し、鎖肚、重舌無声、舌焦、遍体青黒などの症状に対しては「急療するにあらざれば、百に一活なし」(原漢文)<sup>29)</sup>として、臍風と撮口に「天麻円」(南星、白附子、牙消、天麻、五靈脂、全蝎、軽粉、巴霜)が有効であるという。処方があることから、ここでも「鎖肚」は肛門の完全な閉塞を意味するのではなくして、肛門部の強い狭窄を示唆している。しかし、降って1468年に成立した寇平の「全幼心鑑」には「鎖肚證 初生児鎖肚證あり。在胎中、諸熱物を食するに由る、熱毒壅盛して肛門に結して閉じて通ぜず。児生後、復た滋することなし。所以此のごとし。」(原漢文)とある<sup>30)</sup>。ここでの「鎖肚」は明らかに肛門の閉鎖を意味している。そして「鎖肚」の原因は在胎

中の「熱毒」が原因であるとする説が唱えられ、この説が以後踏襲されていく。そして16世紀前半までこの傾向が続くことは、1506年の魯伯嗣の「嬰童百問」に「世医得効方」<sup>29)</sup>と同様に「天麻円」が鎖肚、撮口にも有効とあり<sup>31)</sup>、1534年の王鑾の「幼科類萃」に「鎖肚は胎中熱を受けることに由り、熱毒壅盛して肛門に結して閉じて通ぜず。復た滋潤することなし。所以此の如し。」(原漢文)<sup>32)</sup>と「全幼心鑑」<sup>30)</sup>とほぼ同様の記述がなされ、さらに1549年の万全による「万密齋医学全書」に収載された「片玉心書」に「凡そ小児生下して、大便三五日も通ぜざる者は、此れを鎖肚と名付く」(原漢文)<sup>33)</sup>とあることによって窺われよう。

ところが16世紀半ばに至って「鎖肚」に酷似した「鎖肛」の語が出現した。すなわち1557年に出版された徐春甫の「古今医統(大全)」の巻八十八「幼幼彙集上」に「鎖肛證第十」があり「小児、胎中熱を受けるに由り、熱毒肛門に壅盛して閉じて通ぜず。また滋潤することなし。薬方 蘇合丸 小児鎖肛、大便不通を治す」(原漢文)とある<sup>34)</sup>。前半の文は「全幼心鑑」<sup>30)</sup>の文とほぼ同じである。「古今医統(大全)」は280種余の医書から記事を抜粋し再編集したものであるから、必ずや「鎖肛」の語も先行する文献に用例がある可能性も否定できないが、現在のところ、これ以前の文献に「鎖肛」の使用例を見出すことは出来ない。しかし、一つ大きな問題がある。「古今医統(大全)」<sup>34)</sup>の目録には「鎖肛證第十」ではなくして、誤って「鎖肝候第十」とある。この文脈で「鎖肝」は全く意味をなさない。本文に「鎖肛證第十」とあるので「肛」を「肝」と誤って刻したことは間違いない。このような大部の書冊では目録が疾患の検索に特に重要である。恐らくこのような刻版時の誤りのため、中国では後発の「鎖肛」の語は先発の「鎖肚」を全面的に駆逐して普及するまでに至らなかったと推察される。このことは「古今医統(大全)」<sup>34)</sup>以後に発行された王肯堂の「幼科證治準繩」(1607)に「不大便 俗に鎖肚と名づく。胎中熱を受けることに由り、熱毒壅盛し肛門に結して閉じて通ぜず。また滋潤す

ることなし。所以此の如し」<sup>35)</sup>と述べられ、また龔廷賢の「寿世保元」(1615)の「辛集八卷」の「鎖肚」の項で「一に論ず。鎖肚は胎中熱毒を受けることに由りて、熱毒壅盛して肛門に結し、大小便閉じて通ぜず。」(原漢文)<sup>36)</sup>と記され。さらに1742年に発行された呉謙らの「医宗金鑑」で「初生門上」に「大便不通、鎖肚と名付く」(原漢文)とあり<sup>37)</sup>、1750年に発行された陳復正の「幼幼集成」においても「臍風証論」の項に「一に曰く。鎖肚は胎中、熱毒壅盛し、肛門に結して大便通ぜず」(原漢文)<sup>38)</sup>と上述した「古今医統(大全)」<sup>34)</sup>中の文言と同様な表現を用いながらも、「鎖肛」の語を採用せず「鎖肚」と記していることによって理解されよう。

ところが1630年の孫志宏の「簡明医穀」には「鎖肚」ではなくして再び「鎖肛」の語が披見される。すなわち巻六の「幼科総論」の冒頭「初生十則」中に「鎖肛」が披見される<sup>39)</sup>。しかし、ここでも問題がある。これに注釈を加えて原書には「鎖肛」ではなくして「透肛」とあるとする。事実「初生十則」の第7番目に「透肛：罕に児初めて生まれて穀道なき有り。大便出すこと能わず。旬日にして必ず救われず。」(原漢文)とある。ここでは「透肛」が明確に「鎖肛」の意味で使用されている。さらに不思議なことに「初生十則」をさらに詳細に解説した後文では、見出しは「透肛」ではなくして「鎖肛」となっており、「胎中、熱を受けるに因りて熱毒壅盛し、肛門に結して通ぜず。また滋潤することなし。所以此有り。」(原漢文)とある。この説明文も「古今医統(大全)」<sup>34)</sup>の説明文、つまりは「全幼心鑑」<sup>30)</sup>の文に近似している。ここでの「鎖肛」は上述の「透肛」とは少し意味合いが異なるようで「肛門」の内側が不通となっている状態を指すことは、後文に「即ち、是肛門内に合す、当に物を以て之を透す。」(原漢文)とあることによって理解される。いずれにせよ、この書においては先行する「幼科證治準繩」<sup>35)</sup>などの「鎖肚」が全く採用されずに、それとは異なる「透肛」と「古今医統(大全)」<sup>34)</sup>に披見される「鎖肛」の語が使用されたことは注目すべきであろう。しかし、「簡明医穀」<sup>39)</sup>で提唱さ

れた「透肛」と「鎖肛」は余り普及していなかったことは、同じ年に出版された龔居中の「外科百効全書」(1630)<sup>40)</sup>に両語が披見されないこと、さらには上述したように、1742年に発行された呉謙らの「(御纂) 医宗金鑑」<sup>37)</sup>で「初生門 上」において、そして1750年に発行された陳復正の「幼幼集成」<sup>38)</sup>においてこれらの両語が採用されていないことによっても傍証される。

このような中国における状況は、中国医学を積極的に摂取受容した日本にも伝えられた。すなわち「鎖肛」の語が日本に伝えられたことは、名古屋玄医の「医方問餘」(1679)の「卷五」に「鎖肛 古今医統、肛と作す。是也。準繩に云う。大便せず。俗に鎖肛と名く。胎中、熱を受けるに由りて、熱毒壅盛し、肛門に結して閉じて通ぜず。」とある<sup>41)</sup>。「古今医統 (大全)」<sup>34)</sup>では「鎖肛」ではなくして「鎖肛」となっていることにも言及している。ここでの「準繩」は前述した王肯堂の「幼科證治準繩」<sup>35)</sup>であろう。また、「鎖肛」の語も日本に伝えられたことは下津寿泉の「古今幼科摘要」(1709)に「古今医統 (大全)」<sup>34)</sup>から引用して「小兒、胎中熱を受けるに由りて、熱毒壅盛し、肛門に結して閉ざして通ぜず。復た滋潤することなし。所以に鎖肛の候あり。」(原漢文)<sup>42)</sup>と記述されているによって証される。しかし、名古屋玄医の「医方問餘」<sup>41)</sup>は写本であり、用語の普及という点において版本に比較すると大きな役割を果たしたということは出来ないと思われる。1688年に出版された吉田五玉の「諸証類部」では「後陰」の項に「穀道無孔」の条があり<sup>43)</sup>、李梴の「医学入門」<sup>44)</sup>の文を引用しており、したがって「鎖肛」、「鎖肛」の語は見えない。

この点、1686年に上梓された蘆川桂洲の「病名彙解」<sup>45)</sup>の影響は大きかったと考えられる。本書は病名がいろは順にルビ付きの片仮名混じり和文で記述されて読み易く、検索にも便利であり、収載病名数も1780余という多数に上っているために頻繁に利用され、本邦での病名の普及にも貢献したと考えられる。「卷六」の「左」の部で「鎖肛 肛ハ小腹也。鎖ハトザスト読リ。小兒生レテ熱毒ニテ肛門ヲ鎖テ大小便ヲ通ゼザラシム

ル也。」(8丁表、裏。句読点一著者、ルビ省略)とあり、さらに「鎖肛ハ、胎中、熱毒ヲ受ルニヨツテ壅盛シテ肛門ニ結シ、大小便閉テ通ゼス。」と「寿世保元」<sup>36)</sup>の「鎖肛」の説明文を引用している。「病名彙解」<sup>45)</sup>の8年後の1694年に刊行された波多野三柳編の「保嬰三方」にも「鎖肛」の語が見え<sup>46)</sup>、「肛を按ずるに医統に肛を作る」とあって「古今医統 (大全)」<sup>34)</sup>では「鎖肛」となっている点が理解された上で「鎖肛」の語が普及し始めたことを物語っている。青洲が愛読していた「外科正宗」<sup>5)</sup>、「外科百効全書」<sup>40)</sup>にも「鎖肛」の名が披見されなかったことに加え、「鎖肛」の病名は甚だ理解し難いと青洲が考えたに違いない。「鎖肛」つまり「肛」は「腹」を意味するから「腹が閉じている」といっても直ちにその病態を理解できない。「肛」を「肛」に代えて「鎖肛」とすれば、「肛門」が閉じていることが一目で理解できる。青洲はこのような考えで「鎖肛」を採用し始めたのであろうと推察する。ただし、青洲は著述の中で「鎖肛」の語は自分が提唱したとは一言も主張していない。あるいは青洲は「鎖肛」の語がすでに「古今医統 (大全)」<sup>34)</sup>に披見されることを承知の上で、「鎖肛」よりも適切な語であるとしてこの「鎖肛」を援用したことも全く否定する訳にいかない。

何れにせよ、青洲が日本においては最初に臨床の場において「鎖肛」の語を使用したことは間違いない。呉は「鎖肛 Atresia ani et recti 青洲先生ノ手術トシテ特ニ詳キ記載ナシ。」<sup>47)</sup>としているが、これは誤りで4巻本「青洲医談」の「卷之一」<sup>48)</sup>と「卷之三」<sup>49)</sup>に以下のように比較的詳細な記述がある。以下に引用する。句読点は著者による。

「卷之一」：鎖肛ハ菊坐ヨリ小孔アル者ハ治シ易シ。陰門ノ下ノ端ニ小孔アリテ、糞汁出ル者ハ、肛門中へ小サキ披針ヲ入、立ニ切コトモ分寸、指二本位入程ニシテ横ニ少シサキ、兎角、陰門ノ方へ披針ノユカヌヤウニ氣ヲツケ刺ヘシ。何レ穴ノ塞リ易キ者故ニ、指ヲ入テヨク探リ、羔ハ破敵ヲ入ル也。且、男子ハ、陰囊ナトノ下、或ハ会陰ノ辺ニ小孔出来テ、尿汁出ル



者アリ。是ハ曲リ探リヲ以テ、次第ニ肛門ノ辺へ切行也。左様ニスレハ、下ヨリ肉上テ癒、痔瘻ノ癒形ノ如クナル事アリ。女子ハ、陰門杯ニ左様ニナルアリ。是モ男子ト同様ニシテ切行ヘシ。右ノ如ク治療スルニ、次第ニ探リ行クヘシ。遂ニ肛門ノ処ヘユク故ニ、無孔者ヨリ治療ノ便也。医、鎖肛ヲ治療スルト語レ共、其口、披針を刺シテ紐ヲ入ル者少シ。女子モ陰門ト肛門ト隔膜破テ、夫ヨリ糞出ル者ハ不治ナリ。<sup>48)</sup>

「卷之三」：男子鎖肛婦人ノ人ヨリハ急ナル者也。能菊坐を見定、披針ニテツキ破ルヘシ。切ルト、直腸ヒツクリカヘリテキテ、ヒツ、ク者也。披針ハ直ニ刺シ、一文字ニ切也。后メイチャヲサス。七八日位ヒハイキル者也。婦人ハ会陰ヨリ陰門ノ方ヘ糞ヲ出ルモノナリ。是ハヒストロスヲ菊坐ノ方ヘ通シ切ヘシ。跡ヲ縫ニハ不及。自在自然ニ癒ル者也。<sup>49)</sup>

以上によって、青洲は適切に「鎖肛」について解説していることが分かる。4巻本の「青洲医談」は1850年に編集書写されているので、これに従えば、青洲の「鎖肛」の起源は1850年まで遡ることは確実である。しかし、上の文章から察するに、青洲はこれより大分以前から「鎖肛」の外科的治療を行っていたことが推測されるので、書写年代の確かな史料を精査した。1821年に青洲が撰して、広田 泌が編集した「続禁方録」「卷二」の「治痔脱肛方」の項に次のように記されている。

点痔方 馬錢 六分 龍腦 四分 密煉点

鎖肛及併指切開テ后、肉癒切口細ク成ルモノ也。是ニ鉛ノ末ヲ左突ニ練交傳ル也。又蛇退皮末密陀僧ノ末練交傳ル甚妙。(句読点一松木)<sup>50)</sup>

「点痔方」は鎖肛、合指症の術後の狭窄予防、癒着防止のために用いられた処方であるから、この記述は少なくとも「鎖肛」に対してすでに1821年の時点で手術が行われていたことを示し、青洲が確実に「鎖肛」の用語を用いていたことを

示している。なお、1791年に編集された「禁方(拾)録」の「痔漏類」の項にはこの「点痔方」は披見されないし、「鎖肛」の用語も見られない<sup>51)</sup>。したがって、現在の知見では、青洲による「鎖肛」の語の初出史料は1821年に編集された「続禁方録」である。

#### 4. 「鎖宮」について

「鎖宮」の語は玄調の造語になるもので、「続瘍科秘録」巻之四に「鎖陰」に続いて「鎖宮」の一症例が記述されている<sup>52)</sup>。玄調は、野州黒羽某の女16、7歳の治療経験を詳細に記述し、「愚按スルニ、此女子生レナカラ子宮無口ノ者ナルヘシ。即、鎖肛、鎖陰ノ類ニテ、鎖宮ト謂テ可ナリ。今マテ少シツ、下リタル経水ハ子宮頭ニ淋漏ノ如ク小孔アリテ出タルナラン。然レ共、何程モ下ラス故、其血逆退シ、子宮ノ膜間ヘ蓄滞シテ漸漸ニ膨張シ、一大塊を成シ、其他ノ諸証をモ発シタルナルヘシ、以下略」と述べている。ここでは、手術時に使用したと思われる「窺宮管」(図2)の言及がないが、玄調が以前から使用して、それが日常的になっていたので、敢えて言及するまでもな

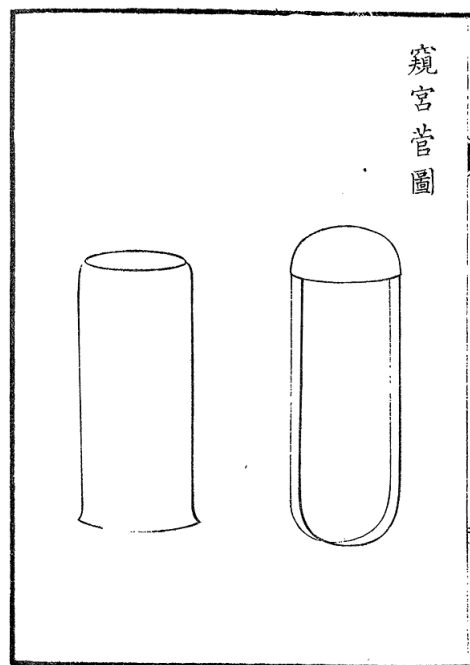


図2 「窺宮管」の図(文献31から)



いと考えたからであろう。玄調の「瘍科秘録，卷之四（下）」冒頭に述べられている「鎖陰」の項目中、「窺宮管」について割注して「予ガ新製スル所。陰門へ入レ，子宮ヲ見ルノ器ナリ。華氏ニテハ『ハリカタ』ヲ用フレ共，『窺宮管』ノ便ナルニ及バズ。」<sup>53)</sup>と，本器具が張形より優れている点を強調している。以上から，「鎖宮」の初出は1859年の「続瘍科秘録」である。

## 5. 明治期の医書における鎖陰，鎖肛について

以上述べてきたように，青洲によって「鎖鼻」，「鎖陰」，「鎖肛」，そして，玄調によって「鎖宮」の用語が援用・造語されたが，「鎖鼻」は「鼻腔閉鎖」という症状を表す語の方が適切であると判断されてその後使用されなくなった。後者の「鎖宮」も一聞して理解し難いため使用されなくなったと考えられる。これに反して「鎖陰」と「鎖肛」は明治期に入っても廃れることなく普及して諸書

に採用された。1872年から1910年にかけて出版され，かつインターネットで閲覧できる医書17種を対象に鎖陰と鎖肛の語を調査した結果を表1に示す。学問の進歩によって疾病も細分化され新しい用語が作られたことが分かる。「鎖陰」は前述した「青洲医談」に示された分類，すなわち「ロニテ塞リシアリ，中ニテ塞シアリ，就中ムツカシキハ子宮ロニテ塞リシ也」<sup>17)</sup>の3種の総称であり，「ロニテ塞リシアリ」に対応するのが「処女膜閉鎖」，「中ニテ塞シアリ」に対応するのが「陰閉鎖」，「鎖陰」，「子宮ロニテ塞リシ」に対応するのが「子宮閉鎖」である。「鎖陰」と「鎖肛」は幕末から明治期の欧米医学の影響に晒されても医学界で生き延びて今日に至っており，さらに広辞苑<sup>54)</sup>や日本国語大辞典<sup>55)</sup>にも収載されている。

表1 明治期の医書に現れた「鎖陰」，「鎖肛」，「鎖宮」

著編者	書名	刊行年	披見される用語
クラーク (半井成質訳)	外科拾要 (巻六)	1873	鎖肛
ドングリソン (奥山虎章訳)	医語類聚 (増訂版)	1878	鎖肛，陰閉鎖，子宮閉鎖
栗原順庵	洋漢病名一覧 (後編)	1879	鎖陰
リュウドロー	医学七科問答 外科学	1879	鎖肛
ジルンベルゲル (今井玄秀訳)	袖珍処方学 (巻三，小児科編)	1880	鎖肛
桜井郁二郎	婦人論 (一)	1881	処女膜閉鎖，鎖陰，子宮閉鎖
富山淳道編	病名三語編	1882	鎖陰，鎖肛
木戸 麟編	病名類別集	1882	鎖陰，鎖肛
足立 寛	外科各論 (巻之八)	1883	鎖陰，処女膜鎖陰，子宮口閉鎖
橋本包周編	統計必携病名彙纂	1884	鎖肛
足立 済	尿閉及ヒ鎖陰治験 (病床治験録明治医家所収)	1885	鎖陰
伊沢富三郎	病名薬名和洋便覧	1885	鎖陰
アグニュー (鳥谷部政人訳)	外科神論 (下)	1885	鎖陰
フォーゲル (高阪駒三郎訳)	小児科全書 (前)	1892	鎖肛
ジュールセン (柴田耕一訳)	婦人科準繩 (再版)	1896	処女膜閉鎖，陰閉鎖，子宮閉鎖
東京医事新誌局編	袖珍医語字林 独羅和訳	1903	鎖陰
興津 磐，大島 樞編	独羅和医語新辞典	1905	鎖陰，鎖肛，肛門閉鎖，処女膜閉鎖，鎖陰
加藤辰三郎等編	新医語辞典 (和羅独英)	1910	鎖肛

## 6. 青洲が「鎖」を冠する医学用語を造語した理由

以上述べて来たように、青洲が造語した医学用語には「鎖」を冠する疾患名が多い。しかしながら、なぜ青洲が「鎖」冠する病名を多く造語したのかは不詳としか言いようがない。というのは青洲自身このことについて何一つ記していないからである。恐らく詳細に検討すれば「放平(術)」(拘縮した関節を伸展させる手術)以外にも、例えば「鎖吻(口)」などの医語が青洲による造語として確定される可能性がある。「鎖」を冠する病名については、青洲は1810年頃に「鎖鼻」を造語したが、恐らく「鎖鼻」が以前に使用されていたか否かを、当時最も多くの病名を容易に検索できる蘆川桂洲の「病名彙解」<sup>45)</sup>を参考にしたのではなかろうか。「左」の部を見て「鎖」を冠する病名が殆どないことを知って、以後「鎖陰」、「鎖肛」などを造語したと考えても事実と懸隔することが甚だしいことはないであろう。もちろん、青洲のことであるから「病名彙解」<sup>45)</sup>以外に「外科正宗」<sup>5)</sup>、「外科百效全書」<sup>40)</sup>、「(御纂)医宗金鑑」<sup>37)</sup>などの然るべき中国の医書を参照したことは間違いないであろう。

### おわりに

華岡青洲は全身麻酔薬「麻沸散(湯)」を開発して、それまで拱手傍観するのみであった各種の外科的疾患の手術を行い、わが国の外科領域に新境地を開拓したことで知られる。それに加えて青洲は病名を造語した。「鎖鼻」、「鎖陰」、「鎖肛」の他に「放平」、「鎖吻」などの語も造語したと考えられる。しかし、青洲の著述に「同名異書」、「異名同書」があって、佐藤持敬の言葉を借りると写本間に重複錯誤、誤謬百出<sup>56)</sup>という状態が見られるために、ある語が確実に青洲の造語になることを確定することは必ずしも容易ではない。今回は、それらの内、先学の研究によって青洲の造語とされる「鎖鼻」、「鎖陰」、「鎖肛」の3語について初出文献年と初出年について検討を加えた。中国ではすでに13世紀末に「鎖肚」の語が用いら

れ普及していたが、その後1557年に「鎖肛」が造語された。両者は共に日本に伝えられたが、日本では「鎖肚」の語が普及した。その理由は必ずしも判然としないが、病名を知る上で便利な1686年の「病名彙解」に「鎖肚」の語が採用されたことが一つの理由であろう。青洲はその間の詳細な事情を知らずに独立して「鎖肚」よりも理解し易い「鎖肛」を造語したと考えられる。青洲の高弟本間玄調による造語「鎖宮」についても言及した。いずれにせよ、「鎖鼻」、「鎖陰」、「鎖肛」および「鎖宮」の造語は青洲および玄調による業績の一端を示すものである。

本稿を終えるに際して史料の閲覧、複写に御協力を戴いた公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋に感謝の意を表す。

### 参考文献および注

- 1) Keys T. The History of Surgical Anesthesia. New York: Schuman's; 1945. p. 30
- 2) 松木明知. 杉田成卿訳の「亞的児吸法試説」について. 日本麻酔科学史の新研究. 東京: 克誠堂出版; 2010. p. 61-80  
著者の最近の研究によって、成卿の使用以前の1843年に米沢藩の堀内素堂によって「幼幼精義」の中で「麻酔」の語が使われていることが判明した。しかし「麻酔」は形容詞的に使用されており、独立した名詞としての用例ではない。
- 3) 松木明知. 本邦に“局所麻酔”の概念を伝えた Johann N. von Nussbaumの“麻酔薬論”について. 麻酔 2016; 65(10): 1090-1096
- 4) 小川鼎三. 医学の歴史(中公新書). 東京: 中央公論社; 1964. p. 29-34.
- 5) 陳実功. 外科正宗. 1617. (北里研究所附属東洋医学総合研究所編. 和刻漢籍医書集成 第13輯. 東京: 医聖社; 1991)
- 6) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p. 332-337
- 7) 森 慶三, 市原 硬, 竹林 弘編. 医聖 華岡青洲. 和歌山: 医聖 華岡青洲先生顕彰会; 1964. p. 102, 103, 110, 114
- 8) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p. 312-313
- 9) 本間玄調. 瘍科秘録. 1837. 卷四. 42丁表
- 10) 京都大学附属図書館富士川文庫所蔵. 請求番号ハ83

- 11) 華岡青洲. 瘍科瑣言. 大塚敬節, 矢数道明編. 近世漢方医学書集成29 華岡青洲 (一). 東京: 名著出版; 1980. p.188
- 12) 三輪敬節がいつまで春林軒で学んでいたかは明らかではないが, 3年間とすれば退塾は1810年となり, したがって, この写本はそれまでに完成していたことになる.
- 13) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p.332-333
- 14) 本間玄調. 瘍科秘録. 1837. 巻四. 35丁表
- 15) 著者による「青洲医談」および異名同書60数本の調査によれば, 「青洲医談」は初め4巻本として成立したらしく, それらが様々に組み合わせられて1巻本の「青洲医談」が作られた. 4巻本の内, 2巻は1830年代後半に「燈下医談」(前, 後篇)と改題され普及した.
- 16) 華岡青洲. 青洲医談 (内題は「青洲先生医談」) 東京国立博物館所蔵 請求番号 QB-530
- 17) 華岡青洲. 青洲医談. 春林軒二十一種 六集. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵 請求番号 杏3169-10. 巻之三 50丁表, 50丁裏
- 18) 華岡青洲. 青洲医談. 春林軒二十一種 六集. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵 請求番号 杏3169-10. 巻之一 18丁裏, 19丁表
- 19) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p.333-336
- 20) 「華岡青洲墓誌銘」中の言葉. 「華岡青洲墓誌銘」は下記の文献に正しく復刻されている.  
松木明知. 華岡青洲研究の新展開. 東京: 真興交易(株) 医書出版部; 2013. p.45-55
- 21) 鎖陰治法記一卷. (「東郭先生医談」の末尾に合冊) 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵 請求番号 乾2720
- 22) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p.465, 503-504
- 23) 鎖陰治方記. (「産科瑣言」, 「天刑秘録」と合冊) 内藤記念くすり博物館大同文庫所蔵 請求番号 35989
- 24) 広田 泌 (子泉). 見聞録 (写本). 21丁表-裏. 東京医科大学図書館所蔵. 請求番号 古医書715
- 25) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p.398
- 26) 船曳卓堂. 婦人病論. 1850. 巻之一. 15丁裏-16丁表 (京都大学貴重資料デジタルアーカイブ, 2019年1月21日閲覧)
- 27) 本間玄調. 瘍科秘録. 1837. 巻之四. 38丁表
- 28) 曾世榮. 活幼心書 (写本). 1294. 巻之二. 腹痛三十 (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 29) 危亦林. 世医得効方. 1343. 巻十一 小方科 活幼論, 臍風, 撮口. 北京: 人民衛生出版社; 1990. p.363, 368, 369  
本文にも記したように「天麻円」の処方, 南星, 白附子, 牙消, 天麻, 五靈脂, 全蝎, 輕粉, 巴霜 (用量省略) である.
- 30) 寇平. 全幼心鑑. 1468. (寛文10年の和刻本, 公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋 請求番号 大塚1540) 巻二 鎖肚證. 36丁表, 裏
- 31) 魯伯嗣. 嬰童百問. 1539. (公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋 請求番号 貴54) 巻一 噤風撮口臍風第三問 6丁裏
- 32) 王鑾. 幼科類萃. 1534. 巻三 初生門 初生諸症治法に「鎖肚者. 由胎中受熱. 熱毒壅盛. 結于肛門. 閉而不通. 無復滋潤. 所以如此」とある. (維基文庫 自由図書館. <http://zh.wikisource.org/wiki>)
- 33) 万全. 片玉心書. 1549. 巻之四 胎毒門. 万全. 万密齋医学全書. 北京: 中国中医薬出版社; 1996. p.534
- 34) 徐春甫. 古今医統 (大全). 1557. 巻八十八 幼幼彙集上 46丁裏-47丁表 (京都大学貴重資料デジタルアーカイブ, 2019年1月21日閲覧)
- 35) 王肯堂. 幼科證治準繩. 1607. 集之一 生下胎疾の項の「不大便」46丁表-46丁裏. (京都大学貴重資料デジタルアーカイブ, 2019年1月21日閲覧)
- 36) 龔廷賢. 寿世保元. 1615. 辛集八巻 38丁表 (正保2年の和刻本, 和刻漢籍医書集成 第12輯. 東京: エンタープライズ; 1991)
- 37) 呉謙, 劉裕澤. 御纂医宗金鑑. 1742. 巻五十 初生門 (上) 30丁表-30丁裏. (早稲田大学 古典総合データベース. 請求番号 ヤ090 00595. 2019年1月21日閲覧)
- 38) 陳復正. 幼幼集成. 1750. 巻之一 臍風証論 (中医臨床必読叢書. 北京: 人民衛生出版社; 2006. p.37)
- 39) 孫志宏. 簡明医教. 1630. 幼科総論 初生十則, 鎖肚 (中医古籍整理叢書. 北京: 人民衛生出版社; 1984. p.303-5, 311)
- 40) 龔居中. 外科百效全書. 1630. 巻之三 臀腿部, (宝暦12年の和刻本「新刻秘授外科百效全書」(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ, 2019年1月21日閲覧)
- 41) 名古屋玄医. 医方問餘. 1679. 巻之五 幼科上 (京都大学貴重資料デジタルアーカイブ, 2019年1月21日閲覧)
- 42) 下津寿泉. 古今幼科摘要. 1708. 病門八 (京都大学貴重資料デジタルアーカイブ, 2019年1月21日閲覧)
- 43) 吉田五玉. 諸証類部. 1688. 五巻 「後陰」12丁表 (京都大学貴重資料デジタルアーカイブ, 2019年1月21日閲覧)
- 44) 李梴. 医学入門. 1575. (寛永19年本, 北里研究所附属東洋医学総合研究所編. 和刻漢籍医書集成 第9輯. 東京: エンタープライズ; 1990)
- 45) 蘆川桂洲. 病名彙解. 1686. 巻之六 8丁表-8丁裏 (国立国会図書館デジタルコレクション, 2019年1月21日閲覧)
- 46) 波多野三柳編. 保嬰三方. 1694. 巻之中 6丁裏-7



- 丁表 (京都大学貴重資料デジタルアーカイブ, 2019年1月21日閲覧)
- 47) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p. 311
- 48) 華岡青洲. 青洲医談. 春林軒二十一種 六集. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵 請求番号 杏 3169-10. 卷之一 19 丁裏, 20 丁表
- 49) 華岡青洲. 青洲医談. 春林軒二十一種 六集. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵 請求番号 杏 3169-10. 卷之三 51 丁裏
- 50) 華岡青洲撰. 統禁方録 春林軒二十一種 十二集. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵 請求番号 杏 3169-12. 卷之二 49 丁表
- 51) 華岡青洲撰. 禁方録 春林軒二十一種 十一集. 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵 請求番号 杏 3169-11. 卷之四 14 丁表~17 丁裏
- 52) 本間玄調. 統瘍科秘録. 卷之四. 1859. 9 丁表~12 丁裏
- 53) 本間玄調. 瘍科秘録. 卷之四 (下). 1837. 3 丁表
- 54) 新村 出編. 広辞苑 (第6版). 東京: 岩浪書店; 2008. p. 1100, p. 1117
- 55) 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部編. 日本国語大辞典 第二版. 東京: 小学館; 2001. 第五巻 p. 1352, 第六巻 p. 1
- 56) 呉 秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京: 吐鳳堂書店; 1923. p. 386

## An Etymological Consideration of the Japanese Phrases *Sabi, Sain, Sako, and Sakyu*

Akitomo MATSUKI

Department of Anesthesiology, Hirosaki University Graduate School of Medicine

Seishu Hanaoka coined several Japanese terms of surgical diseases; *sabi* (nasal atresia), *sain* (vaginal atresia), and *sako* (anal atresia). However, it had remained unknown as to when and in what writings those words appeared the first time. I made a careful examination of Hanaoka's writings and identified their first appearances in his writings. Although the word *sako* had been coined in *Gujin Yitong* in 1557 in China, Seishu is most likely to have coined *sako* independently because at that time another word, *sato*, was widely used in China and Japan. *Sain* and *sako* have been used in the current Japanese medical textbooks. They appear also in the most popular and authoritative Japanese dictionaries *Kojien* and *Nihon Kokugodaijiten*. Gencho Honma, a disciple of Hanaoka, made the word *sakyu* to describe uterine atresia in 1859, but it became a dead word later.

**Key words:** Seishu Hanaoka, Gencho Honma, *Sain, Sako, Sakyu*